フィールド調査覚書

——舞台裏を中心として——

舟　橋　和　夫

キーワード
フィールド調査
実践知
ドンデーン村調査
調査経験

1．はじめに

フィールド調査にかんする書物や論文は，世の中に数多く出回っている。そこで展開されている議論や話題は，フィールド調査の理論や方法論についてのものが中心である。それらは調査を行う上で必要なものであり，指摘されていることは一部を除いて貴重なものばかりである。フィールド調査の理論・方法論に関する言説は，それらがなければフィールド調査の実施が確実に困難なものばかりである。しかし多くの場合，実際にフィールドに調査に入ると調査理論や調査法以外の諸問題が山積し，それらが障害となって調査ができない場合も数多く見受けられる。それらはフィールド調査の理論・方法論というアカデミックな本体を舞台裏で支えている，ノンアカデミックな事柄についてのことが多い。それらを考慮の外におくか，無視するか，あるいは放置するといったことなどによって調査障害が生じていると考えられる。

上述のように，フィールド調査にかんする書物や論文では，それらノンアカデミックな事柄は調査と直接関係しないとか，調査とはなじまないとか，時にそのようなことは調査の弊害になるといった理由でもって，無視されるか，全く触れられないか，触れられても簡単にさっと，さも問題がないごとく軽く記述される。それはまるで家庭生活でのシャドーワークといわれる家事のごとく，調査研究におけるシャドー知識であり，調査者の眼中にないといえる。

アントニー・ギデンズは，知識には科学としての知識と実践としての知識という知識の二重性があって，われわれはその両者の知識によって生活を営んでいると述べている[1)]。本論でこれから議論しようとしているのは，どちらかといえば調査にかんする科学知である調査理論・調査方法についてではなく，むしろ調査を実施する際に言語化されることのほとんどない実践知についてである。これまで経験した調査の学習によって身体技法の一部になっているため，調査の実施の際にいちいち説明をしたりしない知識である。その実践知の一部について明示し，実践知深化の端緒になればというのが，本論の趣旨である。したがって，見過ごしやすく，問題になりにくく，シャドーノリッジであるノンアカデミックな事柄について，ここではアカデミックな事柄と同等に重要だとの認識に立って，議論していきたい。

このような認識に至ったきっかけは以下のような筆者の経験による。2002年度から科学研究費によるフィールド調査が筆者を研究代表者としてスタートした[2)]。この研究は1964年に故水

1) Anthony Giddens, 1979, *Central Problems in Social Theory,* Southampton and London, Macmillan.（友枝俊雄・今田高俊・森重雄訳，1989，『社会理論の最前線』ハーベスト社）

2) 科学研究費補助金，基盤研究（A）（1），課題番号：14252001，研究課題：ドンデーン村再々↗

野浩一が行ったドンデーン村調査（第1次調査）に端を発する。それから約20年後，1981年度から始まったドンデーン村の再調査（第2次調査）に，筆者は1調査者として参加した。そして，さらに約20年後，すなわち水野調査から数えて40年後に，上記のようなドンデーン村の再々調査（第3次調査）がスタートしたのである。

この第3次調査は，メンバー全員が1981年度からスタートした第2次調査の参加者によって構成されている。それ以外の参加者は院生をはじめとする，フィールド調査を初めて経験する若い研究者の卵たちである。その際，筆者は1調査者として参加した第2次調査時には全く見えなかった，また経験することがなかった，きわめて煩わしい事柄に，今回直面した。そのとき，第2次調査当時のプロジェクトリーダーが，調査時における煩わしい様々な事柄に対して調査終了時に漏らした言葉，もうこのような調査はゴメンだ，という言葉を改めて非常に重く受け止めたのだった。

ドンデーン村の調査経験が，これを書く契機を与えてくれたけれども，これから述べることがすべてこのドンデーン村調査の経験に基づいているわけではない。今まで筆者が経験してきた数多くのフィールド調査がその基礎にある。

この問題提起は，このようにしなければならない問題というよりも，このような問題があって，それは調査目的と同等ぐらい同じ重みがあるといいたいのである。

2．フィールド調査舞台裏の構成要素

フィールド調査を支える舞台裏も多くの事柄から構成されている。それらは雑多にモザイク模様を呈しながらフィールド調査を取り巻いている。今回はそれらを羅列することからはじめたいと思う。

1） 病気・事故・安全

フィールド調査はフィールド（現場）を対象とする故に，常に事故はつきものである。事故が起こったことで調査を中止せざるを得なくなった例は数多くある。特に調査中の事故ほど調査者を悩ますものはない。被調査者の事故も悲劇的であるが，調査者の事故は調査の中止という問題があるため，調査者にとってさらに深刻である。筆者の経験した例を挙げてみよう。

時は1981年。ドンデーン村プロジェクトによる村の総合調査を実施中の時である。当時は約10人ほどの調査者が毎日調査に追われていた。目が回るほどの忙しさだった。そのとき調査者の中の何人かが，熱があるといいだした。それが発病の最初である。ほとんどの調査者は風邪と自己診断をした。実際風邪とよく似た症状であった。熱があり，体がだるい。筆者は当日，調査地近くの町コンケン市での市場買い出し役およびコンケン大学での用務代行役が当番として当たっていた。車に買い物をする女性を乗せて村を出発した。途中の市場で女性を降ろし，大学に行き用事を済ませた。しかし，非常に体がだるいので，研究プロジェクトのカウンターパートである当大学の教授にそのことを訴えた。すると，教授は当大学の付属病院を紹介してくれ，待っている患者を横目に見ながら特別に診察室で診察を受けさせてくれた。その素早い対応に感謝しながら，診断を待った。結果は「風邪」であった。調査地に帰って，今日は調査はせずにゆっくりするのがよい，という助言を聞きながら，病院を後にした。多くの買い物を済ませた女性を再び市場で乗せて，調査地である村に帰った。

高い熱が出たのは，その後である。そして，ついに寝込んでしまった。体を動かすにも力が入らない。横たえた体はぐったりしている。見えるのはぐるぐる回る村人たちの顔。のぞきこんでいる村人たちはなにやら話しかけてくれるが，声は遠い。もらった薬を飲んだが，どうも効き目がない。気を失いかけてから，数日が過ぎた。今となってはこれらのことを正確には記

↘訪：東北タイ天水田農村における40年間の動態研究，研究代表者：舟橋和夫，研究期間：平成14年度から17年度。

憶していない。しかし，当時の感覚として鮮明に覚えているのは，ここで死ぬのかと本当に思ったことである。

気がつくと，筆者だけでなく一緒に調査をしている仲間たちが，次から次に同じような症状を訴えて寝込んだりしていた。ある人は町のクリニックで診察を受け，即時入院し点滴を受け，輸血までしたという。ある人は，日本への帰国途中に発病し，高熱のため空港から大学病院に直行したという。さらに，その原因はマラリアらしいという噂が立った。

デマをはじめさまざまな情報が，村人を含めてもたらされていく中で，調査者間にも不安が広がり，受け身一方の村人（被調査者）間にも不安が増幅した。そのときが調査継続の危機であった。そのまま推移したと仮定すると，調査の継続は困難であったと筆者は推測する。

幸い，正確だと思われる情報が届きだした。われわれの罹った病気は，デング熱もしくはデング出血熱というものであり，死亡率はかなり高いものの，回復すれば安全であることが徐々に分かってきた。そして，調査者も被調査者も徐々に落ち着きを取り戻していった。

しかし，この騒動のため調査は一時中断した。約2週間の間，全く調査活動はできなかった。調査の再開に目処がついたときには，限られた滞在期間に黄信号が点滅しかけていた。もう少し長期にわたる調査活動の中断が起こったら，はたして調査は完了できたのだろうか，今から考えても心許ない。

デング熱あるいはデング出血熱は，蚊を媒介して感染する。われわれも充分注意をしていた。室内でのデスクワークの時にはたえず蚊取り線香を足下に置いていたし，寝るときは当然ながら蚊帳を使用していた。また，汗をかけばできる限りアップナーム（水浴び）を心がけ，蚊を寄せ付けない工夫をしていた。しかし，蚊によって感染したのである。

このように病気に対しては充分すぎるほど注意をしていても，感染するときは感染すると考えた方がよい。むしろ，注意すべきは感染時の対応策と感染後の処置である。感染を予防する対策はもちろんのこと，感染したときのために保険をかけておくことは必須条件であろう。また，感染後の処置をできる限り迅速に行うことであろう。筆者の場合は，体がだるいという初期段階で，筆者が単なる風邪だろうというのに対して，プロジェクトリーダーは病院での診察を主張した。筆者にとっては煩わしいので拒否していたが，リーダーは病院に行くことを強く言い張った。いわばリーダーの言葉にいやいやながら病院に行ったのが事実である。筆者の場合は病院に行ったからといって，誤診であったためあまり結果は芳しくなかったが，しかし，その対応はきわめて的確なものであった。問題は事故発生後の対応にかかっている。

本論の執筆中に，SARS（重症急性呼吸器症候群：新型肺炎）の問題が東アジアを中心に発生した。この問題が社会問題化した背景として，中国関係者が行ったSARS発病後の対応のまずさが指摘されている。事件の社会問題化は，ほとんどすべて事件発生後の対応にかかっていると思われる。

2) 友達・人との関係

村に長く住んで調査に従事していると，当然ながらある特定の村人たちと親しくなり，ある特定の村人たちとは疎遠になる。親しくなった人たちとはよく酒も飲んだり，水田の出小屋で一緒に食事をしたり，一緒に町に出かける機会も多くなる。そしてそのような付き合いを長期間続けていると，ますます親しくなっていく。彼らは血のつながった家族ではないが，しかしある種の家族のような感情も沸いてこない方が不思議である。

他方，疎遠になった村人たちとは，たとえ村中で出会ったとしてもなんとなく表面的な挨拶を交わすだけになりがちである。それ以上の言葉はなかなか出てこない。疎遠になりつつある人びととはますます疎遠になる。親しくなってしまった人たちとは何でもない冗談も，疎遠になった人とは互いに冗談を言い合うなど，意識

してもできるものではない。冗談も突然言えば，相手も当然びっくりするだろうと思って口を閉ざす。このように，親しい人とはより親しくなる。逆に，疎遠になった人とはさらに疎遠になる場合が多い。

フィールド調査の教科書などでは，調査者は被調査者とのラポールが大切とうたわれている。その通りである。しかし，参与観察などフィールドに入って調査活動を行うとは，調査者という側面もあるが，一人の人間としてそこで生活するということでもある。したがって，フィールドの中では，親密な関係を築いた村人もいれば，疎遠な関係になる村人もいるのである。

この親密と疎遠という両者の関係は，調査に微妙な光と陰を落とす。一つは取得する情報の偏在である。当然ながら村や人の情報は親密な人間関係を経由して入ってくる。しかも，顕在化する場合もあるが，その情報の多くにはたいてい経由した人物の価値観が潜在的に付加されてくる。調査者はその偏見を含む価値観をそのまま村の公正な情報として，あるいはそのまま健全で代表的な村人の情報として取得する場合がおこり得る。特に村で調査を開始した当初の情報は，村にも多様な意見があり得ることを予想し得ても，そのまま無批判に情報を取得する場合が多い。当初の情報は中立の情報として認識しまいがちである。すなわち，村人からの情報はすべて価値中立的情報として認識しようとする力が働く。

そこに問題が生じる。情報はすべて偏っていることを認識すべきである。情報経由人物によって情報の質が変わるということの認識が不足しがちである。長期に村に滞在していると，完全ではないにしても，どの情報がより中立の情報で，どの情報がより偏りがちであるかの判断がつきやすくなる。その点では，長期の滞在は有効であるといえよう。

しかし，ただ単に長期に滞在していれば，正確な情報が確実に入手可能であるかというとそうではない。人は他者への好き嫌いによって行為に差をつける場合が多い。調査者が村人の多くから嫌われてしまった場合は最悪の結果が生じることになるであろう。しかし，そのようなことにはなるのは稀である。ある人から異常に好まれて，かえって困る場合もあり得る。また，村人同士の好嫌関係の渦中に飛び込む場合もある。長期の滞在は慣れを伴い，情報管理に甘えが生じやすい。

被調査者同士の間で憎み合っている事例を紹介しよう。その事例では，親族の間で相続を巡る醜い争いがあった。その片方の世帯調査を済ませて，数日後に他方の当事者へのインタビューを開始しようとしたところ，世帯主による強い調査拒否の意思表明がなされた。どうしても調査に協力することはできないという。2回，3回と足を運んでも，拒否の姿勢は強く，まったく話を聞こうとしなかった。説得できなくて，日時だけがむなしくすぎていった。そのようなときに，村人が亡くなり葬式が行われることになった。もちろん筆者は出かけていった。死者との共食のため酒が振る舞われ，筆者がすでに酒をかなり飲んでいるところへ，調査拒否の世帯主がやってきた。死者とは親友であったらしかった。彼もかなり酔いがまわっていたのであったろうか，彼が筆者の前にやってきて，なぜ調査拒否をするのかを説明しだした。われわれの行っている調査はいかにプライバシーを侵害しているかなどを大きな声で話し始めた。筆者はそれをうなずきながらただ聞くだけであった。そのうち，出席者の何人かがその話に加わってきた。彼らが調査拒否の人に話し出したのである。筆者（調査者）は決して誰にも味方をしていないこと（あるいは嫌われていないこと），調べた結果を決して他人に話していないこと（話しているのを聞いたことがないこと），村にとってこの調査は何にも役に立たないかもしれないが，しかし調査は村にも村人にも何も悪いことをしないこと（あるいはしないだろうこと），インタビューを受けたら50バーツ（約150円）の現金が手にはいること，など出席者の数人が調査拒否者に話し出したのである。そうして，1時間か2時間ぐらいたったと

きであろうか。その調査拒否者は突然，筆者に向かって明日インタビューに来てもいいと話したのだった。それは彼らが調査拒否者を説得しようとして話したからではなかった。単に事実だけを激論の中で筆者に確かめながら話しただけだった。

この真意は未だによく分からない。しかし，調査者の態度が調査の続行にとってきわめて重要であることを示している。すなわち，よく言われることであるが，被調査者は調査目的やその他のことではなく，調査者個人の行動により関心を持つのである。

調査後，帰国して自宅に帰れば，家人に村の話をする。当然家人は調査に行っている村はどんなところかと思う。村に興味を持つ。筆者も機会があれば是非どのような村か見せたいと思う。そのチャンスが巡ってきた。末子は5歳の家族5人で，突然村を訪れた。それでも村人は歓迎して，ご飯をさっそく炊いてくれて，食事をすることになる。しかし，子どもたちはハエの群がるご飯を見て食べようとはしない。村人は一番のごちそうを用意してくれたにもかかわらず，であった。他の観光地なども案内して，家人を空港に見送ってから村に帰ると，村人はわしらも今度はおまえの家を見てみたいものだのぉーと，筆者にそっとささやいた。

研究仲間に呼びかけ，彼らの来日の費用を調達して，彼らを日本に連れてきた。どうしても日本に行きたいと言っていた村人ひとりと，町に住んでいるしっかり者の後見役の娘，それに日本に留学経験のある同伴者の3人を日本に呼んだ。村人のパスポート取得から始まって，タイ国での送り迎え，そして日本での送り迎えと準備を整えて，彼らを迎えた。研究仲間はそれぞれの自宅で彼らを迎えたり，ホテルに泊めたりして，また各地を案内したりして，歓迎した。

大変な思いをして日本に呼ぶことができたのは，結局村人一人とその娘であった。そして，次に村を訪れたときには，当然他の村人が筆者に問いかける。次は誰が日本に行けるのか？かろうじて研究者仲間が協力して同伴者を含む3人を日本に呼ぶことができたが，これからも何人でも日本に呼べる状況ではない。経済的にも困難であるし，また彼らとの人間関係上も決して好ましい状況ではない。しかし，彼らの望みは日本に行くことである。果たして，研究者が無理をして村人を日本に呼ぶことがいいことであろうか，結論は出ていない。

また，90年代，村近くの集落には日本に出稼ぎに行って立派な建家（近所の人は御殿と呼んでいる）を建てた人がいる。その人たちは日本に行けばすぐ金持ちになれると自慢して話しているという噂が広まった。村人はその言説を信じて疑わない。日本は経済的にきわめて豊かである。若い女性が日本に行けば売春の危険が伴うが，若い男であれば現在しているのと同じ土木作業をすればなんの問題もない。男であれば誰でも日本に出稼ぎに行くだけで金持ちになれる。日本帰りの成金の人と同じように立派な家を建てられると信じている。

そうなれば，なんとしても日本に出稼ぎに行きたい。アーチャン（先生の意）は日本人でしかも地位も高いではないか。アーチャンに頼めばいい就職口を紹介してくれるに違いない。ここは頼むのが当然だ，と村人が考えるのも不思議ではない。しかも，アーチャンはなにか村のためにしたいといっていたではないか。

ということで，村人は筆者の周りを取り囲んで，日本での就職口の世話を依頼することになる。筆者には村人の日本での就職口を世話するほど，能力があるわけではない。断ることはできても，その後の関係悪化の心配が待ち伏せている。

3) 住居・オフィス

村中に長期に滞在して調査を続けようとするなら，村人のどこかの家に頼んで住まわせてもらわないと困難なことが多い。ある特定の家に住むというわれわれの行為が村中に波紋をもたらすことも多々ある。

その一つは，ある特定の家に下宿住まいをすることに決定した場合，それは単にある部屋を

住まいとして借りるという「下宿住まい」以上の影響を村人に及ぼすことがある。その家に住んでいるというだけで，まるでその特定の家の属する派閥に肩入れをしたかのような影響を与える。いうまでもないことだが，村がある特定の一派閥のみで形成される場合はきわめて少ない。多くは複数の派閥によって形成されている。その場合，ある特定派閥に味方をしたと不幸にも見なされると，他の派閥からの情報は，一方的に遮断される場合が多々ある。村を巡る重要な情報が届かなくなる。あるいは，極端に歪められた情報が届くようになる。筆者の経験からいえば，最初に入ってくる情報は，そのような特定の派閥に属するある特定の人の悪口である。新鮮な驚きを持って耳にはいる。やがてその特定の人に対する悪口は，所属派閥以外の人からも入ってくる。その話は，その人がどんなに悪い人であるかが強調される。いままでこんなことをさぼっていたとか，こんなうるさいことを善良な人に言ったとか，とにかくその悪口の枚挙にいとまがない。そうして，悪人に仕立て上げられた人を通して，われわれのグループがいかにいいグループであるかを強調される。そうしたグループ間の綱引きの渦中にあって，ふわふわ波間を漂える内は気分的にも楽であるが，調査者がやがてどちらかのグループに属せよという意志決定の態度を要求される時期が，長期滞在の場合には起こる可能性は高い。その影響により，身を置いていない，すなわち味方ではないと判断されたグループからの情報は，完全に入手不可能になる場合すらある。その不完全情報により「村を描く」ことになるのである。村中での著者の立場を明示的に示すことなく。

もう一つの問題は，日本人が経済的に豊かであることによる問題である。彼らにとってたとえ学生という金銭的に縁のない身分であっても日本人というだけで金持ちに見える。したがって，彼らにとっては高額な下宿代に関心が集中する。われわれにとって，それほど高額でない下宿代や食事代も，彼らにとって見れば，地元民に貸すよりは明らかに利潤が大きい。そのため，下宿をするらしいという噂が広まれば，目立った動きをするわけではないが，盛んに売り込みをする。特にあの家に下宿するのは間違いだと，戸締まりの悪さをあげたり，汚れていることや危険とかを列挙して，いかに他の家が優れているかをアピールする。日頃は全く来ることのない，年老いてしかも歩行も困難な村人がわざわざ筆者のところまで来て，そのことを内緒話として話して帰る。その涙ぐましい努力は見るに耐えない。

近頃，確かに村で生活するにも現金がいるようになり，金銭感覚が敏感になりつつある。20年前であれば，筆者との話では村人は金銭を話題するのではなく，むしろ心を問題にして，心の温かい人，心の広い人がいい人だといいあっていた。近頃は金のある人が，金使いの荒い人がいい人に変わったのではないかと錯覚するほど，現金を話題にするようになった。ビジネスライクに交渉を進めることができるといえば聞こえはいいが，現実は金と人間関係に絡まって，ますます人間関係がぎすぎすしてきているようにみえる。

農学系の調査道具の設置部屋や稲干し用の部屋，世帯調査票の保管場所やさまざまなチェックなどに使用する場所，すなわち昼間の仕事場，オフィスとして部屋を借りることがある。その場合も，上記と同様の問題が生じる。こうしたときに判断を誤ると時に命の危険すらある。

それへの対策は，村内の有力者を仲間に入れておくことである。問題が生じたときに彼らがいるのといないのとでは雲泥の差が生じる。とりわけ長老の味方は心強い。筆者はそれによって情報が歪もうと，それは仕方のないことと考える。命を犠牲にしてまで対立情報をとる必要はあるまい。むしろ，積極的に特定派閥に近づきその情報を入手する方が質のいい情報が取れると考える。情報は決して調査者一人が収集しているのではなく，村人の，とりわけ特定の村人の協力があってはじめて収集可能であり，そうした特定の情報提供者（インフォーマント）は共同調査者といえる。したがって，その選択

は慎重を期す必要はあるが，しかし慎重にのみする必要もないであろう。むしろ，積極的に村の中枢を握るグループに接近し，そのグループに肩入れして，情報の提供を受けた方が情報の偏りはあるにせよ，その方が質の高い情報が得られるのではないかと考える。

4) 食　事

食事はそのほとんどを1日3食食べるため，かなりの頻度で考慮しなければならない問題である。フィールド調査での食事についての考察が，これほど頻繁に食べているにもかかわらず問題にされてこなかったのは，不思議でもある。ここでは食事の問題を考察する。

食中毒の問題がまず考えられる。有名で立派な食堂で食べても下痢し，その夜はトイレに何回も行ったという例はいくらでも聞く話である。下痢は日常茶飯事であると心した方がよい。問題はそのとき調査が中断されるほど，程度がひどい場合である。しかし，薬を飲んだり，病院に行って早く手当をした方がいいとおもうが，問題になることはそれほど多いわけではない。

むしろ，食事のことで問題となるのは村中での食事である。村で食事をする場合は，小さくてもいいが食堂らしきものがあれば，そこで食事をすれば，一応の食事は充分にできよう。しかし，食堂がまったくない場合もある。その場合は，食事の用意を村人に依頼しなければならない。依頼する際，食事係として頼むのか，それとも掃除や洗濯も一緒に頼むのかによっても依頼の仕方がことなろうが，これらは問題になることはない。むしろ，われわれが自分で食事を作ることになりかねない場合は，その時間的ロスと労力のロスが問題となろう。

こうして村人に食事係を頼むとなると，誰を頼むかということが村で話題になる。人選でもめる場合が多い。村中には時折農業労働に雇われるという基本的な潜在失業者が多くいる。そうなれば希望者は多い。貴重な情報を提供してくれた関係者の娘に頼む場合は，下宿先の親戚筋であればほとんど問題が生じることはないと思うが，情報提供者と下宿先が何の関係もない場合には問題が生じやすい。それでも両者の関係が良好である場合には波風は立たないが，両者の関係が敵対関係である場合は最悪の事態に陥る可能性は高い。時には情報の遮断も覚悟しなければならない。筆者の友人は，そのために現地の学生をもう一人雇って，情報の収集に努めたほどである。

また，その食事係の作る食事の量が非常に多い場合がある。筆者の経験によると，日本人調査者は筆者1人で，後は調査助手である村の長老が3人と現地の学生3人の合計7人で調査をしていたときのことである。1回に準備する食事の量は優に20人分を越えている。不思議に思って見ていると，われわれが食べ終わると，食事係である娘の一族郎党が続々とやってきて，みんなで食事をしている。このようないわば一族郎党の食事は，当然であり彼らの権利でもある。金持ちである日本人は金というもので食材や労力を提供し，われらはそのお裾分けに預かるのは当然であると考えている。

そのような現象にたびたび出会い，そしてこのことが理解できるまで，しばらく時間がかかった。

3．むすびにかえて

今まで，述べてきたことは従来の理論や方法論とは異質の内容である。しかし，理論的知識内容と技術的方法論のみでフィールド調査が構成されているわけではない。とりわけ調査を舞台裏で支えているもろもろの実践的知識体系がなければ，調査の実施が困難であることは事実である。とはいえ，このようなシャドーノリッジ（隠蔽された知識）をどのように体系化するのか，まだよく分かっていないのも事実である。

筆者自身にこのような内容を記述することに抵抗がなかったといえば嘘になる。体裁的にも従来の「科学論文」を書くべきであり，本論のような記述を差し控えるべきだと何度思ったことか。しかし，いくら調査理論や方法論が立派であろうと，実施できないようなものは何の価

値もないことも重要な指摘である。従来捨てられてきた内容をとにかく積極的に取り上げて記述することは，これからの調査の展開にとって欠くことの出来ない事柄であろう。

調査を巡る今後の課題は，これら隠蔽された知識をどのように顕在化し，どのように体系化するのか，である。その挑戦を続けていきたいと考えている。

（受理　2003年6月6日）